

海龍の宝

2008.12.10

娘は、今日も 海を見つめていました。

ずっと 動かずに。

海の向こうに、なにか 光るものは ないか？
彼の行方を 教えてくれるようなものは 流れてこないか？

ただ ひたすら、海を見つめていました。

娘が待っているのは、彼女の恋人ではありません。
ただの幼なじみです。

島の人々から見たら、「喧嘩相手」と映っていたかもしれません。

「喧嘩するほど 仲がいい」というのは、言葉だけ。
娘と若者は、顔を合わせるたびに、なんらかの 言い争いとなるのでした。

ある日、若者は 娘に言いました。

おまえが どんなに エラそうなことを言ってもな、
しょせん、オンナは オンナだ。

俺は 今日から 漁に出ることを 許された。

もう おまえのことなんか、かまっておれん。
しばらく留守にするが、元気でな。

若者は 急に おとなびた顔になると、ずっと目を細め、
娘に背を向けて走り出しました。

娘は その背中に、思いつきり 叫びました。

漁に出られるオトコが そんなにエライならな。
われに、海の土産を 持ち帰っておくれ。

海龍の宝。
それを 持ってきたらな。
われは、おまえを オトコと認めてやるがし。

それは、どだい無理な話でした。
海龍とは、伝説の生き物。

この島に 古くから伝わる言い伝えの中でのみ 生き続ける存在である
ということは、誰もが 知っていることでした。

それでも、若者は、一度だけ 振り返って、叫び返しました。

おおっ
待っておるがいい。

俺は、おまえに、海龍の宝、持ってきてやるがし。

そして そのまま、娘の返事も待たずに 輝く砂浜に吸い込まれていき、
大勢の漁師たちの中に混じって 海へと 発ったのでした。

沖へ船が出ていくさまを、
娘は 唇をかみ締めて、いつまでも 見送っていました。

それから、数ヶ月が 経ちました。

ある大きな嵐の翌日、船は 島へと戻ってきました。

船は あちこちが 壊れ、
男たちは げっそりと 痩せた姿で ようやく 島へ たどりつきました。

傷だらけになった親方は、
あわてて 浜へと出迎えた女たちの中から 娘を 見つけだすと、
みんなの前へ 引きずり出し、怒鳴りつけました。

おまえは、あいつに なにを 言うたんだ！

あいつは、「海龍の宝を探す」と言うて、
海の奥深くへ もぐって行ってしまった。
あいつは…
あいつは…

親方！
あいつは…
彼は、どうしたの？
一緒に帰ってきたんでしょ！？

親方は、震えていました。

あいつは…
海龍になった。

そんときの苦しみで、のたうちまわって、
ゆんべの嵐を 起こした。

それだけ 言うと、親方は 口を閉ざし、
妻子とともに 小屋へ 入ってしまいました。

ほかの漁師たちも みな、
娘が なにを 聞いても、どんなに 泣き叫んでも、
なにも 答えてはくれませんでした。

みな、じっと 下を向いたまま、それぞれの小屋へ入り、
固く閉ざした扉を 開けてもくれませんでした。

それからというもの、娘は 毎日 浜へ出て、
若者の帰りを 待ち続けました。

朝から晩まで、ひとことも 口をきかずに、
じっと 海を 見つめていました。

そんな娘に 声をかける者は、ありませんでした。

来る日も 来る日も、ずっと 動かずに。

海の向こうに、なにか 光るものは ないか？
彼の行方を 教えてくれるようなものは 流れてこないか？

娘は、ただ ひたすら、海を見つめ、若者の帰りを 待っていました。

どれだけ 月日が 流れたことでしょう。

娘が いつものように 海を見つめていると、
突然 大きな波が ひとつだけ 立ち上がり、娘へ迫ってきました。

娘は 逃げもせず、じっと その波を 目で追っていました。

すると、波は 大きくなり、あっという間に 水の竜巻に 変わりました。

水の竜巻は、ぐるぐると 回転を重ねて
風を巻き込み、さまざまなカタチに 変化していきました。

そして、とうとう 言い伝えの中にのみ存在するという海龍へと 姿を変え、
娘の前に 立ちはだかったのです。

海龍は、冷たく光る瞳で、娘を 見つめました。

娘も、負けずに 海龍を 見返しました。

その瞬間。
娘は 知ったのです。

この海龍を 生み出したのは、ほかならぬ 自分自身である
ということ。

海龍は、苦しみ、もがき続ける娘の姿、そのものでした。

かつて喧嘩相手だった若者の存在を 認めることができず、
顔を合わせれば、競争意識むき出しで 向かっていった自分。

この島で、オトコとして生まれてくることができなかった。
どんなに大きく強くなっても、漁に出ることも許されない。
立派なことは なにひとつ することができない。

そんな 自分自身への苛立ちを ウロコとして身にまとい、
自分自身への憎しみを 角に変え、踊り狂う。

いまや 怒りを むきだしにして うねり、
ウロコを全開に 海を のたうちまわっている 海龍の姿は、
娘の 押し隠した感情 そのものでした。

やめて！

娘は、叫びました。
娘は、声の限り、叫んだつもりでした。

が、真実を知って凍りついた娘からは、言葉も声も出てくることはなく、
ただ そこに 立ち尽くすしかありません。

海龍は、海を 舞台に、踊っていました。

空も海も 真っ暗になり、大きな雲が 空と海を 覆いました。
強い風が吹き荒れました。

波が 大きく荒れ狂う様子は、
まるで 海龍の舞を 助け、彩るかのようでした。

海龍は、どれだけ 怒りにまかせて 舞っていたのでしょうか。

いつしか 海龍の舞からは、荒々しさが 消え、
海を、雲を、空を、島を、そして 娘を 包み込むような、
丸みをおびた 動きへと 変わっていました。

海龍は ゆっくりと 円を描きながら、天と地を つなげました。

娘を見つめる 海龍の瞳は、
もはや 怒りをにじませることもなく、
冷たさを 感じさせることも なくなっていました。

丸く大きな その瞳は、
深いシーグリーンの中に、娘の姿を そのまま 映しだしていました。

ああ、やっぱり。
これは、私だ。

娘は、つぶやきました。

すると、海龍は、ひげを ゆらゆらと 風に なびかせました。

おかえり。

その声は、彼のものでした。

娘が 待ち続けていた、あの若者の声でした。

おかえり。
君は、やっと、君へ戻ってこられたんだね。

娘は、うなづきました。

懐かしいウロコの感触を、
ひげのくすぐったさを、
角の力強さを。

いまや 全身に感じていました。

娘は、大きく 息を飲むと、
波を浴びながら、いっぽずつ、海の手招きに応じて 進んでいきました。

いつから 忘れていたんだろう。
いつから 陸に上がってしまったんだろう。

波に洗われるごとに、「娘」としての記憶は 薄れ、
太古の昔からの喜びが 全身を 駆けめぐりました。

その喜びに せきたてられるかのように。
また、その喜びに 逆らうかのように。

娘は、ゆっくりと 波間を縫って 泳ぎだしました。

最初、2頭のように見えていた海龍は、
空と海が 元の輝きを取り戻す頃には、1頭の海龍となっていました。

そして まもなく、海の底へと その姿を消していきました。

浜辺には、かつて『海龍の宝』と呼ばれたものが 打ち上げられ、
いつまでも、色鮮やかな光を 放っておりました。